依頼主（左）が語る故人の思い出に耳を傾ける。遺族の話し相手になるなど精神的なサポートも心がける＝東京都内

フロントランナー Front Runner

遺品整理専門会社
キーパーズ社長
吉田（よしだ）　太一（たいち）さん（47歳）

形見の品から見える絆と孤独

故人の家財道具を一つずつ、形見分けの品やリサイクル品に仕分けて搬出する。遺品の供養もし、部屋の掃除、脱臭まで請け負う。2002年、そんな日本初の遺品整理専門会社を立ち上げた。

これまでに数多くの死の現場を見てきた。ウジやゴキブリがうごめき、じゅうたんには腐敗が進んでしみこんだ人の形の痕跡が残る。死後、何週間も経った孤立死の現場では、脳天を貫く死臭が漂う。餓死や自殺があった部屋に遭遇することもある。それでも、「どんな仕事も断らへん」をモットーにしてきた。

根底には「お客が期待する以上のことをやるのがサービス業」という哲学と、パイオニアとしての自負がある。

遺品を扱う職業と聞いて、映画の「おくりびと」の主人公のような物静かな人柄を思い描いていると少々裏切られる。大阪弁で速射砲のように話す。あーして、こーなって……と「商売」の構想を語り出すと止まらない。利発な印象は、生来の人なつっこさがうまく中和している。

大阪市生まれ。高校卒業後、地元で板前修行の真っ最中に「東京に行きたい」と思い立ち、貯金を握りしめて上京。飲食店の店長やクラブのスタッフなど転々とする。結婚を機に大阪に戻り、大手運送会社に就職。その後、コンビニ経営をしようと脱サラするが、自己破産寸前に。1994年、29歳で運送会社を設立。引っ越しとリサイクル業を手がけるようになった。

遺品整理サービスを思いついたのはお客の一言。荷物の処分に困っていた客に「こちらで引き取りましょうか」と持ちかけると、依頼主は目を丸くした。表向き引っ越しの依頼だったが、実は故人の持ち物を整理したかったのだ。

途方に暮れていた依頼主は、「ここまでやってくれる人は神様に見える」と感激した。

当時、「遺品整理」という言葉を耳にすることはなかった。ネットで探しても、業者は見つからない。「でも、これだけ喜んでくれたんやからニーズは絶対あるはずや」

読みは、あたった。

「子どもがいない」「遠方にいて長い間、仕事を休めない」など依頼の理由は様々。ただ、核家族化や少子高齢化で家族のありようが変わり、身内だけで完結していた作業を他人に頼らざるをえない人たちはたくさんいた。

依頼は右肩上がりに増えた。今や年間1500件以上を手がけ、売上高は4億円を超える。映画や小説のモデルにもなり、孤立死防止のための講演で全国を飛び回る。

ただ、波瀾を乗り越えてきただけに浮かれることはない。世の行く末も冷静に見据えている。

社会のひずみとして語られる孤立死でも、依頼の大半は親族からだ。長いあいだ疎遠でも、「死んだ後くらい、きちんとしてあげよう」と考える人がまだ多い。だからこそ遺品整理業が成り立つ。

「でも、経済的にも精神的にも、さらに社会のゆとりがなくなれば、全てゴミとして捨てればいい、という時代が来るかも知れません」

b3面に続く

文・立松　真文
写真・鈴木　好之

ご意見・ご感想は be@asahi.com

be on Saturday

b2
beランキング　「心に残る競走馬」
今年は近代競馬が始まって150周年。あなたにとって「最高の馬」は、どの一頭？

売れ筋拝見　コーヒーメーカー　知って安心

b3
サザエさんをさがして　フジ三太郎
キミの名は　オートバックス

b4
be report　イクメン向けビジネス花盛り
再読ガイド　皇室論　結婚未満

b5～7（抜き取ってご利用ください）
週間テレビ　仲間由紀恵さん／番組表

b9
職場の理不尽　石原壮一郎　山科まんが

b10
be between　厄年、気になる？
悩みのるつぼ　車谷長吉　いわせてもらお

b11
てくの生活入門　写真をうまく撮りたい㊦
野遊び大全　歩くスキーで雪林を満喫しよう

be

e1・2
うたの旅人　「ベインテ・アニョス」
世界中で活躍するバンド「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」も歌うキューバの悲恋歌。高齢になって花開いた彼らをハバナに訪ねる。

e3
やさい流　ジャガイモのタラコ炒め煮
作家の口福　伊藤たかみ　押田比呂美コラム

e5
元気のひけつ　夜食べるとなぜ太る？
ひみつ　石井てる美さん　日野原重明コラム

e6
今さら聞けない＋　いろいろなエコカー
ののちゃんDO科学　ホワイトチョコが白い訳

e7
ベルばらKids　高橋睦郎花をひろう
パズル　迷路、クロスワード、数独

歳まで生きるか目標立て、やるべきこと考える」

フロントランナー Front Runner

（b1面から続く）

吉田　太一さん　遺品整理専門会社キーパーズ社長

——同業者は今や100社以上あるとか。そんななかで、キーパーズは、新しいサービスを次々と考えていますね。

相手はマネしているだけやから、同業者と思ってませんけどね。うちは「クーパーズ」という事前整理を始めました。生前に自分の持ち物を点検し、遺品として残るものを確認しておくのをお手伝いするサービス。これを身内でやると、ケンカになる。「お母さん、こんなもん捨てっ！」と娘に言われたら、捨てようと思っていても捨てたくなくなる。キャッチフレーズは「ケンカ防止のためのサービス」です（笑い）。

——多くの死の現場を見てきて死生観は変わりましたか。

死は空気みたいに身近なものになり、恐怖心はなくなった。人は、いつか必ず死ぬのですから。

でも、周りを見渡すと、ただ漠然と生きている人が多いと思うようになった。いつか死ぬのだから一生懸命生きよう、という意識が現代には希薄すぎると思います。

——でも、元気な時から死を意識するのは難しいことです。

自分は何歳まで生きよう、と目標を立てたらいい。もちろん実際には、どうなるかわかりません。でも、まずは「ここまで生きよう」という設定を作り、やり残していることを考えてみる。例えば、あと10年生きるとすると、今のうちにやっとかなあかんこと、後でも出来ること、と優先順位が決まってきます。

男女の違い

——孤立死を防ぐための講演活動も積極的にしています。孤立死のほとんどは男性だとか。

男性の孤立死は、仕事中心に生きてきたことが大きな原因だと思います。サラリーマンには、仕事・寝る・食べる、のワンパターンの生活を送っている人が多い。食べる時と寝る時は、言葉は要らん。職場ではやることが決まっていて、話す言葉も限られる。趣味を持っている人はともかく、家の外では話題が全くない。サラリーマンを長年やっていると、自分が気付かないうちに不器用になっていることがある。そんな人がリストラされたり定年退職したり、奥さんに先立たれたりすると、社会から孤立しやすくなるんです。

——女性は違うと。

男性の会話は「目的」と「結果」があることで成り立つケースが多い。だから、会話自体を楽しんでいるわけではない。女性は話すことでストレスを解消したり、楽しさを覚えたりする。コミュニケーション能力が高いんです。それと、子育てが一段落した瞬間から一日の空いた時間をどう楽しく過ごすかを考えて実践している。

ただ、今は働く女性が増えて、男性と同じように一日の大半を仕事にあてる人も多くなった。仕事以外の話題がなく、近所の井戸端会議に参加できないような女性もいるでしょう。いずれ女性の孤立死も増えてくるのではないかと危惧しています。

——自分は孤立するかもしれないと思う人は、どうしたらいいのでしょう。

まずは孤立死の実態を少しでも知って欲しいと思います。ただ、自分自身が変わろうとしても急には難しい。例えば、若い人に自分の反省を語ったらどうでしょう。積極的に話しかけて会話して、俺たちみたいにやっていると困るから、趣味くらい持たないとアカンとか、あいさつくらいはきちんとしようとか、人間関係を面倒くさがったらアカンとか。

他人に助言した瞬間から、自分もその危険からスッと離れるんです。自分が教える側になったら、意識が変わる。助言する機会を作れば、孤立していく人生に歯止めがかけられると思います。

子への手紙

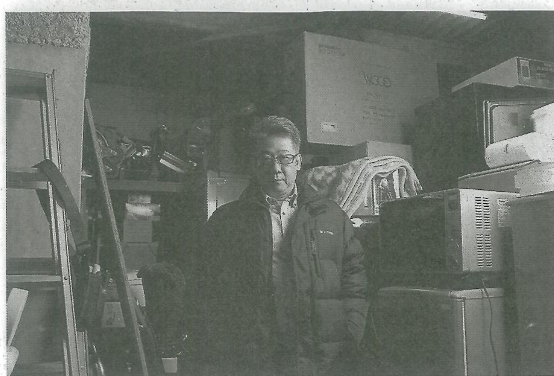
——体験をつづったご著書に、親の遺品の引き取りさえ拒否する「薄情」な子の事例もいくつか紹介されています。でも、吉田さんからは必ずしも批判的な視線は感じません。

確かに寂しいなあ、とは思いますけどね。でも、何かあったんやろうなと。子が薄情になっていくのは、親に原因があるケースが多い。原因もなしに親にいきなり冷たくなるのは反抗期くらい。子はどこかで親をありがたいと思っている。そんな気持ちを超えるようなことを、親が起こしたんやろうと思うんです。

遺品を整理していて、ケンカ別れした息子宛ての手紙が見つかったりします。ケンカして1年たち、5年たち、そのうち電話できなくなってしまう。言えなかった思いを手紙に書きためてしまっていた。「そうやったんか。俺は、許してあげるチャンスも与えなかったなあ」と気付く。やっぱり、親を思う気持ちはずっとあるんですよ。

——いつかは全く違う仕事もやってみたいとか。

誰も考えたことのないサービスを思いつき、お客さんが感動し喜んでくれることが面白いんです。キーパーズも、サービスを磨いて人に喜んでもらいたいという気持ちは強いけど、会社を大きくしたいわけではない。もともと自己破産寸前でしたから、今は出来すぎです。会社もあと10年は持つやろうけど20年は分からん。その折り返し点を見誤ったらあかん。時代とともに終わるのが、一番いいんとちゃうかなと思います。



倉庫には遺品のバッグや家電などが積まれていた＝東京都大田区のキーパーズ東京支店

1964年、表具店の長男として大阪市に生まれる。家族は、妻と大学生の息子が2人。（写真は運送会社勤務時代に長男と）

キーパーズは東京、名古屋、大阪、福岡、北海道などに支店を構える。一般的な料金は部屋の広さなどによって異なるが、「2DK程度の部屋で30万円前後かかるケースが多い」。

開設当初は、求人に苦労した。主任の佐相元博さん(28)は8年前に入社。最初は興味本位で始めたが、吉田さんから「遺品に対する真摯（しんし）な姿勢を学んだ」という。「お客さんから、頼りにされている、感謝されている、とじかに感じられる仕事」

講演などで地方を回る機会が多く、家族が住む大阪の自宅に帰れるのは月に1、2度という。経営に悩んでも、他人に相談しないし、有名経営者の本も読まない。「人の意見で動くと、次から自分の実力で問題をクリアできなくなる」

2009年、同社がモデルとなった、さだまさしさんの小説「アントキノイノチ」が出版される。昨年には映画化もされた。

◆次回は、日本で唯一、動物園専門えさを栽培から出荷配送まで手がけ有限会社「クローバーリーフ」社、西窪武さんの予定です。